

戦争映画をめぐる言説から見る 日本人の歴史認識

—映画『パールハーバー』の上映を機に、「パールハーバー」
への語り分析—

ZHANG Yuhan

2001 年は、真珠湾奇襲攻撃から 60 周年である。アメリカ国内では様々な記念行事が行われた。そのなかでもっとも話題になったのは、ディズニー社が映画史上最高額の製作費を投じて公開した映画『パールハーバー』であろう。この映画は民間・政府の立場の組織や人々から大きな支持を得たので、完全に「官民協力映画」と呼ばれている。そのため、映画『パールハーバー』が製作以前から世界的に注目されたのである。多くの議論されるうちに日本側の批判が予想以上に盛り上がる。理由の一つは、そもそも「パールハーバー」は、すでに「卑怯な日本」や「アメリカの恥辱の日」などのラベルと連想されて、日本の汚名として存在しているのである。避けたい話題が、大作映画の形で世界中に公開されていることは、日本人の反抗感情を煽ることになるのではないだろうか。

吉見(2007)は『親米と反米—戦後日本の政治的無意識』で、様々なメディア現象を通じて、幕府から 1970 年代まで、日本におけるアメリカニズムの重層的な作用について論じている。結論としては、戦後日本の大衆意識の主流をかたち作ってきた「親米」感情とともに、「政治的無意識」の「反米」感情が存在している。しかし、その「政治的無意識」と呼ばれるものの背後にどのような戦後日本的な原因があるのか、その原因は戦後日本社会に普遍存在している歴史認識と関わりがあるのかを疑問として抱いた。

福間(2006)は「反戦」を中心とする書籍や映画、いわば「反戦文学」をめぐる書評や映画評を分析対象とする。その中の世論と輿論との二つの次元の間に展開した拮抗と力関係を明らかにして、戦後日本におけるナショナルなものを検討した。この研究は、極めて少ない戦争映画評論

研究の中の一つである。本研究にとって、重要な参考価値があるが、分析対象は日本本土の作品をめぐる語りであることに対して、「アメリカ」という「他者」の目線から創られた対日戦作品である『パールハーバー』に注目し、異なる民族間の異なるイデオロギーや価値観によって、対立感はいっそう激化するのではないであろうか。

本研究は、ここで問題意識が生じるようになった。映画『パールハーバー』の上映を機に、「パールハーバー」をめぐる語りから日本人の歴史認識を分析するために、三つのステップが必要であると考えた。まず、第1章で、筆者は小学校から高校まで44冊の歴史教科書を考察した結果は、95%以上の教科書に「パールハーバー」に関する記述は曖昧で明確ではないということを明らかにした。そして、「パールハーバー」50周年である1991年前後、「パールハーバー」が湾岸戦争で前景化され、世界中から批判を浴びた。しかし、時の日本はバブルの末期に位置され、経済的な強さに支えられた。一部の知識人や評論家の「パールハーバー」をめぐる言説の内面に隠されている感情は、アメリカの籠から突き破るのであると考えられる。その一方で、一部の知識人や評論家らはアメリカ離脱説を唱えていたが、実際に、優越な経済状況が次第に解消するとともに、日本国家にとって、アメリカとの国際関係を継続的に維持しなければならないという現実も存在している。

第2章で、2001年映画の上映を機に、「パールハーバー」をめぐる言説は非常に盛り上がった。まず、映画がかたる史実やイデオロギー的な話については、激しく議論されていた。そのうち、在米日系人と「えひめ丸」事件被害者らの反発は代表的であろう。その一方で、ラブロマンスで感動された若い女性の観客が多いと明らかにした。また、映画のおかげで、知らなかった歴史を目の前に展開して、平和や多文化への思考が喚起された次世代も明らかに存在していると分かった。最後、9・11は60年前の奇襲攻撃と同じようにアメリカ本土に壊滅的な災難をもたらした。そのため、「パールハーバー」はメタファーとして、もう一度大衆の視野に入るようになった。

第3章では、2001年前後のメディア言説を考察した上で、日本人の「パールハーバー」への認識推移と「反米」感情の変遷をまとめた。2001年前後の日本における対米感情は二項対立であると思われる。具体的には、国家レベルの「親米」と大衆レベルの「反米」であろう。その二つの対立いわゆる拮抗している対米意識が存在する原因は、まさに戦後日本自身の矛盾性と言える。この対米意識の拮抗の背後に隠されているのは、まさに日本社会に今なお存在している歴史認識の歪みである。近代史を少し遡ると、黒船来航後、日本は中華民族的な秩序から離脱、欧米的な侵略と植民地を奪取することを秩序として合理化された。また、敗戦後、日本式な平和は戦争を反省することに基づいておらず、いきなりGHQ(いわゆるアメリカ)に支配され、戦争の事実や記憶を誤魔化しながら、憲法9条に従って、平和な国民国家を立ち上げた。それは、今なお続く日本とアメリカとの「切っても切れない」関係が根本的な原因であると言えよう。その一方

で、戦後から長い復興の道で、様々な知識人や政治家は社会的歴史認識を修復することや平和を構築することに対して努力しているが、まだまだ社会の主流意識になっていない。

2020 年は、戦後 75 周年と「令和」という新しい時代の区切りとして、過去に素直に立ち返って、整理清算するチャンスであると思う。近年アジアのジャンプアップと国々のシャッフルは、日本にとって様々な場面で焦りを生み出す原因であるかもしれないが、他の角度から考えれば、歴史問題と直面して、近隣の国と継続的な友好関係を構築し、一緒に開拓することは賢明なチョイスではないであろうか。